

宇治市文化センターの朗読講座受講生による劇団で、団員は小学3年生から中学2年生までの12名だという。その子供たちに、朗読と劇で源氏物語の紹介をさせるという。子供たちにとって、綺麗な衣装を身に纏い舞台に上がるというのは、それだけでも得難い貴重な体験だろうということはわかる。だが、源氏物語は小さな子供に理解できる話ではない。どうして小学生にそんなことをさせるのだろうかと思いながら幕が上がるのを待った。

もとより子供たちの責任ではないが、源氏物語そのものを上演しようとしているのではないとはいえ、全体に説明的な台詞が多いため、子供たちが随分しっかりやっていたにもかかわらず如何にも今やっているのは源氏物語の紹介ですよと強調しているように見えたのが残念だった。執筆活動を既に終えてしまった紫式部を登場させ、狂言回しをさせるというのは面白い趣向だと思うけれども、司会のような台詞まで喋らせるのは感心しなかった。そのうえ朗読劇といっている部分でも、役者にそれぞれの役回りを説明させる台詞が多い。宇治十帖の内容説明をすることが目的になってしまっているからかも知れないが、ここは物語を劇にする必要があるのではないか。朗読劇でやるなら、朗読を繋いで成立させることを目指してほしい。子供たちが、もっとお芝居をやりたいなら朗読劇に拘らなくてもいいだろう。宇治十帖から離れられないとはいえ、あらすじの解説から脱する上演を目指して頑張してほしいと思う。

あと気になったのは、原文の朗読という難しい課題に挑戦していたことだ。良く練習していたのは分かったけれども、一定のリズムで読んでいて、言葉が切れ切れになり、言葉の意味に沿った読み方になっていなかった。原文だけに意味をとるのは難しいことだけれども、意味不明の呪文を唱えることになってはいけない。読み手は、言葉を理解することから始めるものだ。メンバーを考えると、原文は外国語みたいなもの。原文の朗読に取り組むという判断はよかったのだろうかという気がする。

観ていると、成功を目指して一所懸命練習してきたことが良く伝わってきたし、彼らが満足げだったのが何よりであった。